

[学術論文]

トランスナショナルな移住を経験している家族

—日系ブラジル人家族の現在状況—

The Case of Japanese-Brazilians Living in Japan

矢野 パトリシア

Patrícia YANO

Studies in Humanities and Cultures

No. 8

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 8号

2007年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

DECEMBER 2007

[学術論文]

トランスナショナルな移住を経験している家族

—日系ブラジル人家族の現在状況—

矢野 パトリシア

要旨 日本では、30万人を超える日系ブラジル人が在住している。日系ブラジル人は日本とブラジルの間で生活をし、トランスナショナルな移住を経験している。

本稿は、第一に、トランスナショナルな移住を経験している日本に在住する日系ブラジル人家族の現状を明らかにし、かれらを取り巻く一般的な状況とかれらを巡る固有の問題について述べる。第二に、アメリカに在住しているラテン系移民を対象とした調査 (Stone et al, 2005) に依拠して、日本に在住している日系ブラジル人のトランスナショナルな移住に関する分析結果について報告する。第三に、トランスナショナルな移住が日系ブラジル人の青少年の進学に及ぼす影響に関するケース・スタディを加えている。

キーワード：トランスナショナル移住、日本在住日系ブラジル人、家族問題、青少年教育

1. トランスナショナルな移住を経験している家族の検討

トランスナショナルな移住とは国家を超えて、二つあるいは三つ、またはそれ以上の文化との関係を持って生活することである。現代のトランスナショナルな移住は、一方におけるグローバル化の全地球規模での進展と、他方におけるコミュニケーション・テクノロジーおよびジェット機に代表される高速大量輸送手段の目覚ましい進歩の影響を受けて実現した。こうした科学技術の発展によって現代の国際移民は多文化間での多様なコミュニケーションを可能とするようになった。

トランスナショナルな移住を経験している人間は、出身国に残された親戚との関係を維持し続ける。この関係は経済的、記憶的、想像的、感情的、心理的な関係である。かれらはこの関係を維持すると共に、ホスト社会で子どもが生まれたり、仕事をしたり、財産を獲得したり、友人をつくったりしてホスト社会にコミュニティ (同族・族外コミュニティ) を広げていく。

家族セラピストにとっては、トランスナショナルな関係を持つ家族は現代の「新しい家族」で

ある。この新しい家族については、未だに明らかにされていない点が多い。そのために、徐々にこの移民家族の移民目標、社会的地位、親と子どもの文化変容を対象とする研究が必要となっている。トランスナショナルな移住を経験している家族の子どもは、同化とトランスナショナルな習慣を組み合わせることが多い。その過程を通じては、かれらは「ハイフンつきアイデンティティ」(Hyphenated Identities)を形成していく(Falicov, 2005)。移民の家庭内で生れた子どもは、「感情的移民」(Emotional Immigrant)と呼ばれている。それは、両親の文化に対する愛着を通して自分の文化に対する愛着を形成しているからである。

トランスナショナルな移住を経験に限らず、移住に関して生起する様々な問題は、移住者の文化的特徴の影響を受けている。例えば家族の協力、集合、強い世代間の家族統合を示す文化の場合、移住に関わる別れの苦痛は激しいことが予測される(Smart, 2001)。更に、孤独感や分離の気持ちは、社会文化的期待(望ましい適応、貯金するための移民)に悪影響を与え、罪意識や恥の意識が生じる傾向がある。

移住をする一般の家族は、核家族となる。このため家族内外で、子どもの面倒を見る人や御飯を作る人を決めたり、子どもに様々な新たな責任を与えるなど、多様な調整をしなければならない。

両親だけが移住をする場合、かれらの子どもの面倒は親戚に与えられる。この離れた生活は何年間も続く場合もある。この問題について、子どもは自分の面倒を見ている親戚と強い愛着で結ばれる。両親と再び一緒に生活することになると、両親と子どもとの間に、様々な混乱や問題が生じるであろう(コミュニケーション・ギャップの問題、子どものしつけに関する問題など)

(Sewel-Coker, Hamilton-Collins, & Fein in Thomas, 1995)。両親と子どもとの間にコミュニケーション・ギャップが生じると、更に多数の問題が発生する恐れがある。例えば、コミュニケーションの少ない親子関係は、子どもの学習問題、行動的問題や麻薬中毒の問題にいたる傾向がある。更に、両親がお金を稼ぐために移住をした場合、かれらは残業をすることが多く、子どもと一緒に過ごす時間は少ない。他方、家族の出身国とホスト社会との文化差異(特に社会的ルールについて)が大きいほど、これらの問題が発生する危険性が高まる。この問題は、特に家庭内の問題と教育の問題を抱えている青少年に発生する可能性がある。

日本に在住している日系ブラジル人のコミュニティは、トランスナショナル・コミュニティと呼ばれている。それはかれらが、日伯両国に対して入国・出国する特徴に起因しているからである。「出稼ぎ」は、日本とブラジルとの間で、様々な社会的ネットワークを作り、脱領土化(Deterritorialized)された生活をしていると言われている(Tsuda, 2003)。「日系ブラジル人出稼ぎ」において、ブラジルは「休む場所、日本での生活におけるストレス解消をする場所」となり、日本は「仕事をする場所」となる。これらの特徴で、出稼ぎ日系ブラジル人はリンボー¹で生活していると言われている(Linger, 2003)。

日本に在住している日系ブラジル人にとって、このトランスナショナルな移住、あるいはリンボーで生活することはある程度「楽」である。明確な目標を立てることは、その目標のためにいろいろな不安、我慢、苦勞をする必要がある。そのため、目標達成のために努力をせず、その苦勞を避けがちである。この心理的なメカニズムは、「不確実な、病的な状況で安定する」ような、自己防衛メカニズムである。同時に、このような生活は個人の「不安」を高める。将来どこで暮らすのか分からず、子どもの教育の問題、身体的な問題（年を取るたびに生産工場での仕事が厳しくなる）、社会保険、定年の心配が生じるからである。従って、トランスナショナルな生活をしている個々人は、この「安楽」と「不安」との間に生活をする傾向がある。

アメリカの社会学者ポルテスは、アメリカに在住しているヒスパニック系移民の第2世代を対象として、移住を経験している家族の第2世代の適応を検討している（Portes, 2001）。ポルテスによると、第2世代、つまり移住をした家族の子どもたちが適応できるか否かは、主として次の2つの要因から影響を受けるという。それは人的資本（両親の学歴レベルや言語能力）と社会的資本（移住者グループ内のネットワーク関係やお互いに行われているサポート）である。この2つのバックグラウンドを持つ第2世代の適応は、上昇同化（Upward Assimilation—バイカルチャーリズム、ホスト社会での教育や職業成功）の傾向を持っている。しかし、逆にこの2つのバックグラウンドが存在していない場合、第2世代の適応は下降同化（Downward Assimilation—教育問題、反社会的行動や周辺化された気持ち）の傾向を持つ。

日本に在住している日系ブラジル人の子どもは、教育問題を抱えたり犯罪に手を染めていることもある。日系ブラジル人はトランスナショナルな移住を経験しているため、例えば日本でブラジル人同士での協力的なネットワークを作ることに興味を持ってない。かれらは、いつかはブラジルに帰国することを考えており、日本にいる間、お金をなるべく早く稼いで帰国することを目指しているからである。他方、現在日本に在住している一般の日系ブラジル人両親の学歴レベルは低い（参照 II-4）。従って、ここでは日本に在住している日系ブラジル人の不確定的な生活がかれの子ども（第2世代）に悪影響を与えることがあり得る。例えば、バイカルチャーに適応せず、ダブル・リミテッド2のような問題へ導く適応など。いずれにせよ、日系ブラジル人の第2世代の適応について、これから様々な研究が必要となる。

トランスナショナルな移住に関して、いままでの研究は社会的、経済的な面に焦点を当てているが、トランスナショナルな移住の心理的な面に関する研究はまだ数少ない。他方、日本に在住している日系ブラジル人のトランスナショナルな移住に関する研究はほとんどない状態である。

II. トランスナショナルな移住の特徴に関する調査研究

ストーンら（Stone et al, 2005）は、トランスナショナルな移住をしているアメリカ在住の家族

のモチーフを検討した。かれらの研究によると、トランスナショナル関係を示している家族は9つのパターンを示す傾向がある。①バイリンガリズム。②家庭内では主に母国語で会話をする。③出身国に帰国をしたことがある。④電話で出身国にいる家族・親せき・友人と連絡をとっている。⑤手紙やメールで出身国にいる家族・親せき・友人と連絡をとっている。⑥サテライトやケーブル・テレビ、ラジオで出身国のニュースを視聴している。またホスト社会のニュースも視聴している。⑦出身国とホスト社会に関する情報を得るために新聞を読んでいる。⑧友人との会話は主に母国語で行っている。⑨結婚相手の選択に際して、外婚 (Exogamy) より内婚 (Endogamy) を優先している。

ここでは、ストーンらが作成したアンケート項目に依拠して、日本に在住している日系ブラジル人家族の116家族に関するトランスナショナルな移住特徴を検討した。

(1) 対象者、研究フィールドとデータの収集期間

岐阜県に在住しブラジル人学校 (B学校)に通っている、基本教育の2年生から中等教育の1年生までの家族である。データの収集期間は、2006年7月20日から2006年8月11日の期間である。

(2) 目的

第①目的 日本に在住している日系ブラジル人は、トランスナショナルな移住をどの程度示しているのか。

第②目的 日本に在住している日系ブラジル人は、どのようなトランスナショナルな移住特徴を示しているのか。

(3) 方法

トランスナショナルな移住に関する情報について、ストーンら (Stone et al, 2005) が作成したアンケート項目 (英語) を参照し、その一部を日系ブラジル人の実情に合わせて適宜修正し、ポルトガル語の質問項目を作成した。このアンケートは以下の11項目によって構成された: ①二ヶ国語を話すか ②あるいは、ポルトガル語をおもに話すか ③帰国をしたことがあるか ④電話でブラジルの家族や友人と連絡を取っているか ⑤手紙で家族や友人と連絡を取っているか ⑥メールでブラジルにいる家族や友人と連絡を取っているか ⑦サテライトやケーブル・テレビ、ラジオでブラジルのニュースを入手しているか ⑧地元ニュースも見ているか ⑨ブラジルに関する情報を得るために新聞を読んでいるか ⑩友人との会話はおもにポルトガル語で行っているか ⑪ライフ・パートナー (結婚相手) をどのように選んだか、あるいは選びたいか (同族結婚、族外結婚)。更に、本研究のためにアンケート項目に日本での適応に関する設問 (2項目) を新たに加えた。

最初に、B学校の校長から調査の許可を得て、10家族の予備調査を行った。この予備調査を行った後、それぞれの参加者に名前付きの封筒を配り、アンケートを両親のどちらかに渡すように指示した。アンケートは150家族に対してアンケートを配った。配った150アンケートの回収率は

77.3%、116家族であった。

(4) 結果と考察

フェイス・シートの質問項目（回答者属性、同居している子どもの人数、年齢、在日期间、国籍と学歴）について：

回答者属性の37家族は父親、76は母親、1人は祖父と2人は回答しなかった。

同居している子どもの人数について、子ども1人の家族は58家族、子ども2人の家族は48家族、子ども3人の家族は9家族で子ども4人の家族は1家族であった。

各家族の父親の年齢は、20-25歳が1家族、26-30歳が10家族、31-35歳が19家族と36-40歳が36家族、41-45歳が16家族、46-50歳が8家族、51-55歳が5家族、56-60歳が4家族であった。そのうち17家族は回答しなかった。

各家族の子どもの年齢は0-5歳が14家族、6-10歳が80家族、11-15歳が54家族、16-20歳が17家族、21-25歳が8家族、25歳以上が1家族であった。5家族は子どもの年齢について回答しなかった。各家族における子どもの人数については、子どもの合計は179人で、同居している子どもの合計164人と一致しなかった。その理由としては、いくつかの家族では出身国のブラジルに子どもが住んでいるからである。

初めて来日したときから今までの在日期间については1年以下が6家族、1-2年が7家族、2-4年が1家族、4-6年が22家族、6-8年が13家族、8-10年が7家族、10-12年が20家族、12-14年が9家族、14-16年が12家族、16-18年が4家族、18年以上が1家族であった。1家族はこの項目に回答しなかった。

父親の国籍はブラジル国籍が115人で、日本国籍が1人であった。母親の国籍については、ブラジル国籍が113人、日本国籍が1人、ペルー国籍が1人、フィリピン国籍が1人、という結果であった。

回答者の学歴は、基礎教育未修了が14人（11.02%）、基本教育修了が14人（11.02%）、高校未修了が15人（11.81%）、高校修了が56人（44.09%）、大学未修了が20人（15.74%）と大学修了が8人（6.29%）という結果であった。回答者の学歴について答えた対象者は合計127人であり、それは両親の学歴を答えた対象者が11人であったからである。

アンケートのフェイス・シートに関する結果は、最も多かった年齢は36歳から40歳（父親31%、母親28%）であった。子どもの年齢は、48.7%は6歳から10歳の年齢であり、その次が11歳から15歳の年齢（32.8%）であった。在日期间について見ると、4年から6年が最も多かった（18.9%）。更に、10年から12年の在期間を持っている家族は17.2%であった。両親の出身国について、ほとんどの夫婦（97.4%）はブラジル国籍の同族結婚関係を持つ夫婦である。回答者の学歴について見ると、127人の答えのなかで最も多かった学歴は高校修了（44%）であった。加えて、大学未修了は15.7%であり、大学修了は6.2%であった。学歴について、ブラジル全国

の大学卒業率は7.7% (Censo educação, 2004) であり、ブラジルの大学卒業率と比較をすると、日本にいる日系ブラジル人の学歴はブラジルの平均より低い学歴である。しかし、大学未修了と大学修了を含む大学に入学した人数は21.9%となり、このパーセンテージはブラジルで在住する日系人の大学入学のパーセンテージと変わらない。

トランスナショナルな移住に関する特徴のうち、48.2%はポルトガル語と日本語を両方話すと答えた。これについて、日本語が分からなくても、日本語の単語をポルトガル語に加えて話す(例、今日は「残業」をする—Hoje vou fazer Zangyo) ことがある。しかし、家庭内では主にポルトガル語を話す家族がほとんどであった。

研究対象者の69%は、少なくとも一回は帰国をしたことがあると答えた。これはトランスナショナルな移住を経験している家族に主に見られる特徴である。つまり、日本とブラジルの地理的距離はきわめて大きいですが、帰国をした家族は7割近くあった。

ブラジルにいる親戚や友人との連絡について見ると電話(99.1%)、メール(83%)や郵送(61.2%)を利用している家族の率は高かった。他方、サテライトやケーブル・テレビを利用して、ブラジルのニュースを得ている家族は72.5%であり、日本にあるブラジル人新聞を読んでいると答えた対象者は76%であった。日本で生活をしている間、ブラジルのことを知りたい、あるいはブラジルに関する情報に興味を持つようになった(ストーンら, 2005) ことが関連しているであろう。加えて、日本のニュースを見ていると答えた対象者は61.2%であった。トランスナショナルな移住を経験している人は、出身国の事柄に興味を持っているが同時に地元、つまりホスト社会の日本に関する事柄にも興味を示す。

友人との会話について見ると、ほとんどの対象者(87%)は主にポルトガル語を使っている。これによって、日本人より同族のブラジル人との関係がより強いことが明らかである。

息子、娘の結婚相手については、44%は同族結婚を望んでいると答え、46.5%は分からないと答えた。ここでは「分からない」と答えた対象者の少数(7人)が、回答用紙の右横にその理由を説明していた。この理由について見ると、息子・娘の結婚相手はかれら自身が選ぶべきであると書いた(以下に3つの事例)。この項目についていえば、ブラジルでは家族に関する夫婦関係は、愛情的関係であることを表している。

私たちが彼(息子)に「だめ」と言っても、彼が決めることです。

(A氏、女性、34歳)

私たちの子どもは自由に選択をするべきだ。

(B氏、女性、33歳)

娘は結婚相手を選ぶのは自由です。

(C氏、女性、40歳)

他方、日本の文化について違和感を感じると答えた対象者は、78,5%であった。日本とブラジルとの文化的差異が存在しており、他方、日本に在住している日系ブラジル人のほとんどは日本語が分からないため日本人との交流は少ない。加えて、日本に在住している間、ブラジル人であることを深く意識する傾向があり、日本に対する違和感を拡大する傾向がある。

Ⅲ. 日系ブラジル人家族の適応の問題

日系ブラジル人は、ブラジルの経済的不安を避けるために、80年代以降、工場労働に従事するために日本へ移住するようになった。かれらは「ニューカマー」と呼ばれており、この現象は、「出稼ぎ現象」と呼ばれている。現在、ブラジルから日本へ働きに来ている人の数は、日本全国で30万人を超えている。日系ブラジル人の来日理由の84%は、経済的な理由である（IPC、2005）。日本に在住している日系ブラジル人のうち、ブラジルに家族を残して来日した人があり、これは特に男性移住者の場合である。あるいは少数のケースだが、家族全員で来日する者もいる。更に、日本にきて、日本で結婚した日系ブラジル人もいる。日本で結婚した日系ブラジル人の場合、ほとんどが日系ブラジル人との同族結婚である。

日本に在住している日系ブラジル人家族は、日本での生活の中で様々な問題を経験している。その問題とは、医療、子どもの教育、経済などに関する問題である。かれらは日本で生活を続けるなかで、ブラジルに残った家族と離れる苦痛に加えて、これらの問題を乗り越えなければならない。ここではかれらが経験している社会文化・心理的適応と子どもの教育に関する問題に焦点を当てながら、これらの問題について説明する。

(1) 社会文化・心理的適応に関する問題

トランスナショナルな移住をしている人々は、特定の目標のために移住する。日本に在住している日系ブラジル人は、ブラジルで家などを買うお金を貯金するために来日した。そのためにかれらは様々な経済的な苦勞（来日をするためにお金を借りることなど）、および感情的な苦勞（ホームシックなど）を経験している。従ってかれらの日本での生活は、その目標を達成することが全てに優先し、その目標は家族のプライオリティとなる。しかし、思った通りに目標達成が行われない場合、家族全員がストレスを感じる傾向が見られる。日本に在住している日系ブラジル人が、来日する前に立てた目標は、何度も変化する。例えば、来日当初考えていた様に2年間でお金を稼ぐことが無理であることに気づくと、その帰国を延長する傾向がある。しかし、帰国を延長するに伴って子どもの教育、両親の定年、健康などの問題が生じる。とにかく、かれらにとって、移住の目標を達成できなかったことを認めるのはとても難しいことなのである。

日本に在住している日系ブラジル人のほとんどは、社会保険料を払わない。その理由としては、

個人の都合（帰国することを考えている）あるいは会社側が社会保険に入れてくれないが考えられる。かれらには「いつか帰国をしたい」という気持ちがあり、日本で定年を迎えることを考えない。しかし、結果的には帰国を延長し、日本に永住する事例も考えられる。

医療について、ブラジルで治療を受けるために帰国する日系ブラジル人も少なくない。かれらは、日本語が理解できないため、日本の医師とコミュニケーションが上手くとれない。そのためかれらは診断の内容について誤解をすることもある。部屋を探すことは、日系ブラジル人が経験しているもう一つの問題である。日系ブラジル人に部屋を貸さない不動産業者もいる。日系ブラジル人の間に家賃を払わず帰国をする者がいることや、近所とのトラブル（騒音、ゴミの分別）などがこの問題の理由である。再適応の問題についていえばブラジルで適応ができた日系人は、来日してから、日本で適応することが必要となる。日本に在住している日系ブラジル人は、日本で働いて、帰国をして、再び来日するケースがほとんどである。しばらくの間、日本で働いて帰国をすると、ブラジルでの適応も難しくなる。帰国をした日系ブラジル人の研究をしているナカガワ博士は、「帰国シンドローム」(Síndrome do Regresso) に対する注意を喚起している。これは、帰国後、ブラジルで適応ができず、様々な心的症状（うつ病、無気力、不安など）が発生する恐れがあることを意味している (Medeiros, 2003)。この再適応の問題は、日系ブラジル人に与えられている「一時的な永住者」(Permanently temporary) の移民特徴ステータスが影響していると思われる (Beltrão, 2006)。

日本に在住している日系ブラジル人のほとんどは、生産工場で仕事をしている。生産工場で残業をし、ストレスや過労の問題も経験している。加えて、日本での仕事は、ブラジルで働いていた仕事と異なり、「お金のため」を目的としているために、心理的に満足を得られる仕事とはならない。このような仕事を続けることによって、心身症の症状が発生する恐れがある。更に、家族と離れて日本で生活している日系ブラジル人の場合、このような問題症状が発生する恐れがより高くなる傾向が見られる。

(2) 子どもの教育に関する問題

日本に在住している日系ブラジル人を巡る問題の他の一つは教育に関する問題である。教育の問題としては、不登校、ダブル・リミテッド、基本教育を終えずに生産工場仕事を始めることが主に見られる問題等がある。日本に在住している日系ブラジル人は、経済的理由で来日しているので、教育はかれらにとってプライオリティではないように見えることもある。しかし、この子どもたちの教育に関する問題に最も影響している原因が何かは、未だに明らかにされていない。両親の低い教育レベルが影響しているのか、あるいは両親のストレスがかれらの教育に影響しているのかなどの要因が考えられることのひとつである。幼いころから日本の公立学校に通っている日系ブラジル人の子どもはポルトガル語が分からず、両親との会話が少なくなり、家庭内で

様々な混乱が発生する恐れがある。あるいは日本語が分からない両親の場合、子どもは両親の通訳者となり、この場合、親子関係の間で「役割の逆転」「逆教育」が発生する。逆教育というのは、子どもが両親にホスト社会（日本）に関する一般的な情報を教えたり、両親に通訳者などの役をやりながら、どちらが教えて、どちらが学んでいるのかはっきりしない関係が形成され、親子関係に混乱が起こることになる。

他方、日本に在住している日系ブラジル人の子どもは、両親の仕事や経済的な都合により転校する数は少ないとは言えない。この転校は日本のある公立学校から別の公立学校へ、あるいはあるブラジル人学校から別のブラジル人学校への転校、または日本の公立学校からブラジル人学校への転校である。学校が変わる際に子どもたちは、また新たな環境状況に適応する必要があり、かれらにとってこの転校は簡単な事ではない。

日系ブラジル人の教育のうち、日本に在住している日系ブラジル人青少年の場合、トランスナショナルな移住を経験していることで、日本に永住するのか、ブラジルに帰国をするのか分からなく、進学や将来に対する不安を持っている。

日本に在住している日系ブラジル人青少年は、基本教育卒業後進学をせず、生産工場で仕事を始めるのがほとんどである。日本の場合、ブルーカラーの仕事の時給は、ブラジルと比べると高い時給である。それゆえに、日本に在住している日系ブラジル人青少年にとって、生産工場での仕事は学歴が低くてもお金を稼ぐ「チャンス」のようなものとなる。しかしかれらは、ずっと日本の生産工場で仕事することを目指していない。そして、結果的に教育レベルが低い人の場合、日本では生産工場に限られた仕事しかできず、帰国をしてもブラジルで専門職に雇われるのは難しいという状況がある。

これらの問題は、日本に在住している日系ブラジル人青少年たちに様々な制約を与えている。更に、こういった教育の問題は家族関係にも悪影響を与え、結果として青少年の犯罪も増える恐れがある。

(3) 日系ブラジル人青少年の進学に対する「夢」と「現実」

トランスナショナルな移住を経験している日系ブラジル人は、日本とブラジルとの間を連続的に移動して、どちらの国にも定着できない状態に置かれている。このような生活をしていることで、かれらの子どもはトランスナショナルな環境で育てられ、両親と同じように、どちらにも定着できない状態である。従って、この子ども、青少年たちは悩みを抱えることになるが、問題のその一つは教育に関するものである。

例えば、日本にあるブラジル人学校に通っている生徒の事例を述べてみよう。かれらのほとんどは日本語が不十分であるため、日本の公立高校や大学に進学することは難しい。かれらは、ブラジルで勉強を続けるためにブラジル人学校に通っているが、結果的に帰国をせず、両親と一緒に

に日本で生活を続けるという傾向がある。更に、学校を止めて、生産工場で仕事を始めることが多い。そして両親と同じようにブラジルと日本との間で生活をし、日本では単純労働者として働き、他方ブラジルでは、学歴が低いいため良い仕事を見つけるのも難しくなっている。

この問題をさらに詳しく調べるために、私は岐阜県美濃加茂市にあるブラジル人学校、B学校をフィールドとして研究を行った。岐阜県美濃加茂市の総人口の7% (3,701人) は、日系ブラジル人である (岐阜新聞2007年1月26日)。

(3. 1) 対象者、研究フィールドとデータの収集期間

岐阜県美濃加茂市にあるブラジル人学校、B学校に通っている8年生の日系ブラジル人生徒、40人を対象とした。この学校は、ブラジル文部文化省から認められているブラジル人学校である。この学校では、基本教育 (1年生から8年生) と中等教育 (1年生と2年生) の各1クラスを持っている。Bブラジル人学校の学年は1月から12月である。本調査のデータ収集は、2005年と2006年の11月に行い、8年生の生徒の場合、基本教育卒業の1ヶ月前に行った。

(3. 2) 目的

日系ブラジル人青少年の進学について、「夢」と「現実」を検討すること。「夢」は、かれらが進学に対する目標を意味している。「実現」は、その目標の達成やフォローアップが行った時に置かれていた状況を意味している。

このように、進学について「夢」であったことを「現実」させているのかを目的とした。

(3. 3) 方法

インタビューは2005年の11月 (2005年の8年生生徒22人) と2006年の11月 (2006年8年生生徒18人) に行い、合計40人の8年生2クラスの生徒にインタビューを行った。この40人の対象者を第1サンプル (22人) と第2サンプル (18人) に分けた。

アンケート項目について述べると、ポルトガル語の3項目からなる次のような短いアンケートであった。すなわち、①高校を卒業したい気持ちはありますか。②大学を卒業したい気持ちはありますか。③勉強について、来年の計画を教えてくださいのみつつである。

この「現実」を調べるために、フォローアップとして、それぞれの参加者と連絡を取って、現在何をやっているかについて聞いた。第1サンプルの参加者のフォローアップは2006年の7月に行った (インタビュー9ヵ月後)。第2サンプルの参加者のフォローアップは2007年の2月に行った (インタビュー4ヵ月後)。

(3. 4) 結果と考察

第1サンプルにおける22人の対象者のうち、『高校を卒業したい気持ちはありますか?』という質問項目について、20人が「はい」と答え、2人が「いいえ」と答えている。『大学を卒業したい気持ちはありますか?』という質問項目について19人が「はい」と答え、3人が「いいえ」と答えている。更に『勉強について来年の計画を教えてください』という質問項目については、以下の3人が事例を挙げている：

表3. 4-1

年齢、性別	「夢」 2005年11月に立てた 計画について	「現実」 2006年2月の生活状況
A. 女子	来年仕事をします。日本でお金を稼いでブラジルで勉強を続けたいです。	休学をして、生産工場です仕事をしている。
B. 女子	来年仕事をする事となりました。できれば、夜高校に通いたいです、体が持つがどうか分かりません。もし、えらかったら、帰国をしてブラジルで勉強を続けたいです。将来医学か心理学を勉強することを考えています。	休学をして、生産工場です仕事をしている。
C. 男子	日本で生活を続けたら仕事をしながら勉強をしたいです。帰国したら、勉強だけに集中したい。将来法学部を卒業して、裁判長になりたいです。	同学校で高校1年生に通っている。

第2サンプルにおける18人の対象者のうち、『高校を卒業したい気持ちはありますか?』という質問項目について18人全員が「はい」と答えている。『大学を卒業したい気持ちはありますか?』という質問項目について15人が「はい」と答え、3人が「いいえ」と答えている。更に『勉強について来年の計画を教えてください』という質問項目については、以下の3人が事例を挙げている：

表3. 4-2

年齢、性別	「夢」 2006年11月に立てた 計画について	「現実」 2007年2月の生活状況
D. 女子	勉強を続けたいが、両親はサポートしてくれるかどうか分かりませんので、まだこの質問には答えられません。	彼女の母親は、彼女の卒業式に参加した直後、娘の進学を決めた。その上で、彼女は同じ学校で中等教育へ通っている。
E. 男子	私自身は、大学を卒業したいが、両親は日本で仕事をさせたがっています。そして、貯金をして、自分で大学の授業料を払いなさいと両親は言っています。	生産工場です仕事をしている。
F. 男子	私は進学したいです。しかし、来年仕事をする事になると思います。両親は、ブラジルで、中等教育を卒業した方がよいと言っています。	生産工場です仕事をしている。

合計40人の対象者の調査研究結果について、「夢」であったことと「現実」の状況を以下に明示されている：

表3. 4-3

『夢』であったこと	『現実』の状況
50% (20人) 仕事をしながら、勉強を続けたい	5% (2人) 仕事をしながら、勉強を続けていた
42.5% (17人) 勉強だけをしたい	40% (16人) 勉強だけをしていた
5% (2人) 仕事だけをしたい	55% (22人) 仕事だけをしていた
2.5% (1人) 分からないと答えた	

かれらは高校（中等教育）を卒業する希望を持っており、大学を卒業したい希望を持っている生徒たちがほとんどであった。しかし、結果的にこの調査で進学をした生徒たちはほぼ45%であった。本調査が行った岐阜県美濃加茂市の進学率について、日本人中学生の進学率は98.8%であり、外国人中学生の進学率は75%であった（岐阜新聞、2006年4月3日）。しかし、本調査が行ったブラジル人学校、B学校の2005年～2006年の基本教育から中等教育の進学率はほぼ45%であった。

仕事と勉強を両立させると考えていると答えた対象者は、生産工場での仕事や残業で疲れて、勉強だけ続けるか、仕事だけをするか、どちらかを選ぶこととなる。「仕事だけをしたい」と答えた対象者は2人であったが、結果的に22人が生産工場仕事だけをしていた。他方、この調査に参加した対象者のなかの5人が、両親から進学に関するサポートを感じていないと答えている。

2006年の8年生のクラスは、2005年の8年生クラスと比べると進学率は高かった。これは、偶然なことだったか、あるいは何かの要因の影響で進学率に差異があった可能性もある。例えば、2005年の8年生のクラスは、基本教育卒業式を行わなかった。しかし、2006年の8年生のクラスについて、2006年の12月に、卒業式を行った。2006年のクラスについて卒業式を経験した両親の多数は、「卒業をしていく子どもの姿を見て、子どもの進学を決めた」とブラジル人学校の校長へ伝えた³。この問題についていえば、卒業をしている子どもが両親を感動させて、かれらに教育の重要性を自覚させた可能性もある。つまり、日本に在住している日系ブラジル人は生産工場での仕事で忙しく、子どもと過ごす機会も数少ないので、自分の子どもが教育について「ここまで達成した」と気づいた瞬間に、子どもの進学に目覚めた可能性もある。

他方、進学をした生徒たちについてであるが、かれらは将来休学をする恐れもある。かれらのなかで、ブラジルの大学へ進学を希望している生徒が何人かいるが、かれらは実際に帰国ができ

るかどうかわからない。仮に帰国をしたとしても、両親は日本に残るだろう。この場合、かれらはブラジルで友人や親戚と一緒に住む事となり、かれらにとってこれは不安定な状況である。特に、何年間も日本で生活をしている青少年の場合、一人で帰国をするためには勇気やサポートが必要となり、更に日本に残る両親の不安も高まる。従って、勉強のために帰国をすることは、家族にとって難しいことである。結果として休学して、あるいは中等教育を卒業して、日本にある生産工場で仕事をするを選択するケースがほとんどである。それに加えて、仕事を始めたら、再び勉強を続けることは徐々に難しくなる（時間的、経済的ゆとりがなくなるか、あるいは結婚してしまうため学校へ通学することができなくなるなどの理由で）。

この2つのクラス・サンプルの事例に関する一般的結論として、進学を目指している生徒の数は多かった。しかし、結果的には進学をした生徒は少なかった。更に、中等教育へ進学した青少年たちは、大学へ進学をする目標があっても、まだ様々な問題を超えなければならない。ブラジルで勉強を続けるために、日本にいる間ブラジル人学校で勉強をしたが、結果的には帰国をするケースは少ない。かれらは将来の進学について様々な「夢」をもつが、かれらの「現実」はこれら夢の実現を厳しく制約していると考えられる。

IV. 結論

一般的に言えば、アメリカに在住しているヒスパニック系やヨーロッパ系移民は、地理的な距離が遠くないため、出身国とホスト社会のアメリカの間で、帰国と再来米を繰り返すことを頻繁に行うことができる。しかし、同時にアメリカに在住しているヒスパニック系のうちには不法移民が多く存在している。そのため、かれら不法移民は簡単に帰国ができないことがある。日本に在住している日系ブラジル人は、距離的には郷里は遠く離れているが、不法移民がほとんど存在していないため、帰国と再来日を繰り返す傾向がある。

ストーンらの研究はアメリカに在住しているヒスパニックやヨーロッパ系の家族を対象とした研究であるため、われわれは日本に在住している日系ブラジル人家族を研究対象として取り上げる場合、単純にアメリカのブラジル人家族と同一視することはできない。しかし、ストーンらの研究で説明されているトランスナショナルな移住の特徴を基礎として、日本に在住している日系ブラジル人、またはこの研究の116人の家族のサンプルはトランスナショナルな移住の特徴を持っているということは言える。

我々は、トランスナショナルな移住に関する特徴を数多く挙げるができる。個人や家族によって特徴を強調したり、反対に特徴を示さない場合もある。例えば、ブラジルに残った友人や親戚と連絡を頻繁にとっているが、同族結婚は優先しているとは言えないなどがそれである。それぞれのエスニック・グループにより、トランスナショナルな移住に関するある特徴を強調する

こともある。

一般の人は自分の目標を実現させるために努力をする。しかし、日本に在住している日系ブラジル人家族ははっきりした目標がなく、日本にもブラジルにもどちらにもつかない生活が続ける傾向を持っている。このような目標がない生活が続くことは不安定なことであり、家族全員に影響を与える。目標のない、不安定な生活を経験している親は、自分の子どもにもこの不安を与える。この問題について、例えば、日本の学校に通っている子どもの場合、親から「来年帰国をする、一時的な帰国かも知れないが、とりあえず帰国をする」と聞くことがある。その時この子どもは帰国のことを考えて学校に関心を失う傾向を持つ。ブラジル人学校に通っている子どもも、帰国をすると分かっていたら不安が高まって、成績が落ちる傾向が見られる。

トランスナショナルな移住は、日系ブラジル人青少年の進学に問題を発生させる傾向があり、かれらの両親にとっても、ブラジルでの再適応が難しいため、日本での在住を延長するようになる。その解決のために、日系ブラジル人家族がどのような問題を抱えているかを明らかにし、それらの問題にかれらがどのように対処しているのか、またかれらがどのような心理的な悩みを抱えているのかについて、さらに詳細な研究が必要とされている。

<注>

- (1) 不確定の状態で生活すること。日本に在住している日系ブラジル人は、ブラジルと日本との間で生活をし、どちらにも永住することを決めずに生活をし続けるという意味である。
- (2) カミンズ (2001) の研究によると言語は二つのレベルを持つ。それはBICSとCALPSである。BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) は、対人的コミュニケーションのうえで必要とされる能力を意味し、CALP (Cognitive Academic Language Skills) は、思考および認知的発達を促す能力、つまり、学習に関わる言語能力を意味する。また、カミンズは第一言語と第二言語の関係について、「第一言語能力と第二言語能力は、それぞれ独立しているものではなく、お互いに影響しあうものである」とし、「共通深層能力」と呼んでいる (Common Underlying Proficiency) (Cummins, 1991b)。そして、この「共通深層能力」は、すべての言語使用において機能するのではなく、認知力が必要とされる言語使用、つまり学習に関わる言語使用においてのみ働くとしている (川口, 2005 : 33-34)。つまり、ダブル・リミテッドの子どもは日本語とポルトガル語の会話能力があっても、授業についていける程度の言語能力をもっていない。
- (3) 2005年度と2006年年度の8年生の進学率に関する差異に影響したことについて、筆者はブラジル人学校の校長から意見を聞いた。

<参考文献>

- Beltrão, K., I., (2006). *Permanente e temporário: de kasseguis brasileiros no Japão*. Revista brasileira de estudos Populacionais.
- Censo educação (2004). *Censo da educação superior*. Available from <http://www.edudatabrasil.inep.gov.br/>
- Cummins (1991). Language Development and Academic Learning. Cummins. *Language, Culture and Cognition*. Clevedon – Multicultural Matters.
- Falicov, C., J., (2005). Emotional Transnationalism and Family Identities. *Family Process*. Rochester: 2005.

- IPC(2005)。Comunidade brasileira. *População brasileira no Japão*. Jornal Internacional Press. 26/junho/2005.
- Kawaguchi, N., (2005). *The situation of Subject Learning of Brazilian School Age Students in Japan: The Results of a Survey at a Brazilian School*. 川口直巳。来日ブラジル人生徒の教育学習内容の理解状況ーブラジル人学校での調査の結果から。異文化間教育学会 N. 21/2005 特集在日外国人教育の現在。アカデミア出版会。
- 北川知樹 (2006) 「進学も現実共生へ一歩美濃加茂市の外国人学習支援」岐阜新聞2006年4月3日、
<http://www.gifu-np.co.jp/kikaku/2006/focus/fo20060403.shtml>
- Linger, D. T. (2001); *No One Home: Brazilians selves remade in Japan*. Stanford University Press. Stanford, California, USA.
- Medeiros, E.; (2003). *Dekassegui: Aspectos Psicossociais e Psiquiatricos*. Artigo. Associação Apoio aos Dekasseguis. Curitiba, PR, Brasil.
- Portes, A., Rumbaut, R., G., (2001). *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. University of California Press.
- Smart, J., F., S., Smart, D., W., (1995). Acculturative Stress of Hispanics: Loss and Challenge. *Journal of Counseling & Development*. March/April, 1995. Vol. 73.
- Stone, E., Gomez, E., Hotzoglou, D., Lipnitskay, J., Y., (2005). Transnationalism as a Motif in Family Stories. *Family Process, Rochester*: Dec – 2005. Vol., 44, ISS. 4; pg. 381, 18 pgs.
- Thomas, T., N., (1995). Acculturative Stress in the Adjustment of Immigrant Families. *Journal of Social Distress and the Homeless*. Vol. 4, No. 2.
- Tsuda, T., (2003). *Strangers in the Ethnic Homeland. Japanese-Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. Columbia University Press. New York, USA. Vol. 44, Iss. 4; pg. 339, 8 pgs.